

平成 9 年度試験研究成果

区分	普及	題名	平成10年度病害虫防除基準に採用した主な殺虫剤，殺菌剤		
[要約]					
平成10年度の岩手県病害虫防除基準の改訂にともない、新規に採用した殺虫剤と殺菌剤および変更事項の概要。					
キーワード	病害虫防除基準	改訂事項	殺虫、殺菌剤	生産環境部病害虫研究室	

1．背景とねらい

平成10年度の防除基準編成会議に提案して新たに掲載されることになった内容、新規採用薬剤、および主な変更事項を紹介し、病害虫防除対策の資とする。

2．技術の内容

作物ごとの主な新規採用剤は以下のとおり。また、その使用法と留意点を表1に示した。

(1) 水 稲

- ア プロペナゾール粒剤（箱施用）・・・・・・・・いもち病
- イ カルプロパミド粒剤（箱施用）・・・・・・・・いもち病
- ウ プロペナゾール粉粒剤（パック）・・・・・・・・いもち病
- エ シラフルオフェン剤・・・・・・・・初期害虫、ウンカ・ヨコバイ類

(2) 野 菜

- ア フルジオキシニル剤・・・・・・・・きゅうり病害
- イ ジメトモルフ・マンゼブ剤・・・・・・・・きゅうり病害
- ウ クロルフェナピル剤・・・・・・・・きゅうり、なすのミカンキイロアザミウマ
- エ テフルベンズロン乳剤・・・・・・・・なばなのコナガ

(3) 花 き

- ア 防虫テープなどによる耕種的防除法・・・・・・・・りんどうのウイルス病

(4) 果 樹

- ア デブフェノジド剤・・・・・・・・りんごのハマキムシ類
- イ クロルフェナピル剤・・・・・・・・りんごのナミハダニ

3．普及上の留意事項

表1に示した。

4．技術の適応地帯

県下全域

5．当該事項に係る試験研究課題

- [生産環境4] - 2 - (5) 農薬の作用性・機能の解明と実用化
 - ア．新農薬の効果検定と防除基準作成

6．参考文献・資料

7．試験成績の概要

表1 平成10年度病害虫防除基準に採用した主な農薬の使用法と使用上の留意点

農薬の種類 〔農薬名〕(成分量)	対 象		使 用 方 法	使用上の留意点
	作物	病害虫名		
プロペナゾール剤 〔Dr.オリゼ箱粒剤〕 (24.0%)	水稻	いもち病	使用時期：移植3日前 ～当日 使用方法：50g/箱	移植時処理での残効期間が長く、水面施用剤と同時防除効果がある。穂いもち防除は従来どおり実施する。
カルプロパミド剤 〔ウイン箱粒剤〕 (4.0%)	水稻	いもち病	同 上	
プロペナゾール粉粒剤 〔オリゼメートパック剤〕 (24.0%)	水稻	いもち病	使用時期：6月下旬 使用方法：20個/10a たん水状態で均一に投げ込む	散布器具が不要で省力的である。表層剥離、藻類やウキクサ等が発生していると拡散が妨げられるので使用しない。
シラフルオフェン剤 〔MR.ジョーカー粒剤〕 (1.0%) 〔MR.ジョーカー粒剤DL〕 (0.5%)	水稻	イネミズゾウムシ・イネクビソハムシ	使用時期 粒剤：5月下旬～ 6月上中旬 2kg～3kg/10a 粉剤：6月中下旬 3kg/10a	粒剤の水面施用は吸収移行性がないので、成虫侵入盛期～産卵盛期までに処理する。薬剤抵抗性が発達したイネクビソハムシに対しても効果が高い。
〔MR.ジョーカーEW〕 (19.0%)		ウンカ・ヨコバイ	使用時期：7月下旬～ 8月中旬 EW：3,000倍 粉剤：3kg/10a	
フルジオキニル剤 〔セイビアーフロアブル20〕 (20.0%)	きゅうり	菌核病、灰色かび病	使用時期：7月下旬～ 8月中旬 使用方法：1,000倍	既存剤の耐性菌にも効果が高い。
ジメトモルフ・マンゼブ剤 〔フェスティバルM水和剤〕 (12%・50%)	きゅうり	べと病、疫病	使用時期：生育中 使用方法：750倍	既存剤の耐性菌にも効果が高い。
クロルフェナピル剤 〔コテツフロアブル〕 (10.0%)	きゅうり・なす	ミカンキイロアザミウマ	使用時期：生育中 使用方法：2,000倍	薬剤抵抗性が発達している本種に対して効果が高い。
テフルベンズロン剤 〔ノーモルト乳剤〕 (5.0%)	なばな	コナガ・モンシロチョウ他	使用時期：生育中 使用方法：2,000倍	薬剤抵抗性が発達しているコナガに対して効果が高い。
デブフェノジド剤 〔ロムダンフロアブル〕 (20.0%)	りんご	ハマキムシ類	使用時期：落花期 使用方法：3,000倍	放花昆虫や天敵に影響が少なく、価格も従来剤の半分程度
クロルフェナピル剤 〔コテツフロアブル〕 (10.0%)	りんご	ハダニ類	使用時期：生育中 使用方法：2,000倍	収穫3日前まで使用できるので補完剤として使用する。既存剤と異系統の剤でナミハダニに効果が高い。